

21世紀にキリストを生きる

21世紀にキリストを生きる

2011年のクリスマスを迎えて

<イエスの誕生ー「殻」を破って>

30年越しで、キリストについていく人生の歩みの中で、今年ほど「イエス様が、今この日本におられたら…」と想像を思いめぐらした年はない気がする。

そして、戻ってくるのは「信じている」という者たちへのこの方の関わりだった。当時のユダヤ社会を歩まれたイエス様を思い描いてみる。浮かび上がっている光景は、多くの律法を守ることに熱心で民衆に特別だと思われていたパリサイ人への語りかけだ。要約すれば「あなたが守っているものは何か。自分と自分たちのやり方か。それは、この時代に天の父が願っていることとは大きくずれている。」というものだ。彼らは、伝統を守ってはきたが、肝心のメシヤ登場という一大事の「時代のしるし」を見分けることができなかった。

東日本大震災は、すべての日本人の胸にぼんやりとしていた問いかけを明瞭にした。「現代文明をどう評価し、取り組めばよいのだろうか。」と。

現代は、人間に与えられた創造力を駆使し科学や技術が驚くべき進歩を遂げた時代である。科学や技術の助けを借りて、とても快適な生活環境が当たり前になった。ところが、今回の大震災で科学や技術への私たちの過信は崩れ、逆に、それらが牙を剥いたような事態に直面している。福島県の方々を何度も訪問する中で、そのことをひしひしと感じる。深い部分で原発をどうするかという課題を越えたものなのだ。

「人は科学を駆使してすべてをコントロールできる」という考えは幻想だった。思い通りの便利で快適な生活も砂上の楼閣だ

った。私が10年以上過ぎし途上国と言われた国では、ほとんどのことを人はコントロールすることができず、運命と諦めるだけだった。経済の豊かさの絶頂の日本では、その対極を科学と技術で達成しかけたかのように見えていた。それが崩れた。では、求めるべき別の生き方とは何だろう。日本社会は、その模索を始めている。

その生き方を示す役割こそ、科学が急激な進歩を遂げ「バベルの塔化」した20世紀後半、宇宙の創造主を知るキリスト者に託されたものではなかったかと思う。だが、キリスト者は、神からの創造力を大胆に発揮して科学や技術発展の方向性が人を一層生かすように関わることにも、経済効率最優先の社会の真ん中で、日々、刷新される新しい技術を神の願う人の成長のために用いるように働きかけることにも無関心になってしまった。私たちが置かれた社会全体で「神の国」を教え、模範を生きる「祭司」の役割に任じられていたのに、「居心地良さ」という守りの殻のなかにいることを選んでしまったのかもしれない。

東日本大震災という「時代のしるし」後、初めてのクリスマスを迎える。2千年以上前にイエス・キリストを乳飲み子として地上に送り出された神は、日本人キリスト者の私たちに何を語られるだろうか。

私自身が応えなければならぬ主の言葉に耳を傾けるときとなるように祈りつつ。

「私は、私のひとり子を殻のなかで守り続けはしなかった。あえて暗闇の地に送り出したのだ。多くの人が光を見出すために。」

「今」というカイロスを生きる

＜日本のカイロスをつかむ＞

「時は満ち、神の国は近づいた。」

イエス様は、たった3年の公生涯でしばしば、「時は満ち」、「時が来た」という言葉を用いられた。イエス様の目の前には、数知れないほどなすべきと思えることが現れたはずだ。けれどもイエス様は自分が何かすることではなく、「神の時」を見究めることを優先された。「神の時」であれば、「神の業」が必ず、実現することを理解していたからだろう。私たち人間の目には、驚くべき奇跡と思えることを多くなされたが、イエス様から見れば、「神の時」を見究めて、神が願っていた「わざ」に参加したに過ぎない、ということだったと思う。当然のことが起こっただけなのだ。

このカイロス（神の時）が、大きな地の揺さぶりと大波に襲われた日本に、今年いよいよ、満ちてきたと思える。

80年代後半、途上国といわれる国へ出向くように私が道を示されたカイロスでは、日本が高度経済成長を超え、世界第二位の経済大国になり、バブルのピークに達していた。世界の多くの人々に比べて、日本では誰でも健康を享受し、必要以上が満たされる生活が当たり前になっていた。そして、私は日本を出て隣人になりたいと移り住んだ経済的に最も貧しい国で、人が生きるのに何が必要かをいつも考えさせられた。

やがて、2000年代初めに日本に戻ると、私の目に日本社会はまるで、ただ目前を疾走するために視野を狭くする覆いをつけられた馬のように見えた。この国では、経済競争に勝つために購買意欲をこれでもかとそそっていた。モノはより多彩に進化し、何が自分に必要かをじっくり考えることが不可能に思えるほどあふれかえていた。所有することで瞬間的幸福感を味わおうと消費に走る人々と社会は、内側の不全感を

満たそうと、さらに内に向かって疾走しているようだった。とうとう2010年に「無縁社会」という言葉が登場したとき、人との関係を犠牲にしても個人の欲望めがけて疾走した社会のゴール!?にたどり着いてしまった感がした。今、10代、20代の85%もの若者たちが「なぜ、生きているのか判らない。」という。

私が大学生になって自分の生きる意味を探したとき、愛の神が目的をもって私を造って下さった、ということを経書が語っていると知ったときの安堵は忘れられない。私をご自分に似せて下さり責任を託して下さったほどの神との出会いは、私の人生を転換させた。私の頭をはるかに越え、イエスを十字架で身代わりにするほど人類を愛されるご計画を持つ神のみ声に耳を傾けてついていけば確かだ、と。以来、祈りと支援の応援を受けて、思いもかけない世界の人々と出会い、最も小さい方々から教えられ、共に生きることを学び続けられることに本当に感謝している。

「神は我われと共におられる。」

人を創造されて以来、神の中心テーマは「人と共にいる」ことであり、イエス様にはその「回復」が託された。「共にいる」ことを選ぶとは、自分の外に向かうことだ。内なる不全感をなんとかして満たそうとしても空回りする。そのようには造られていないのだから。

2011年。日本のカイロスに私たちはどう応えるだろう。

自分の周りの人々、地域社会、そして世界の人々と「共にいる」一歩を踏み出すか。

「神の国」へのカイロスが満ちたのだ。

＜世界のカイロスをつかむ-現在：インド・ダリットの人々＞

「この情報やモノを知らないなんて、遅

れるよ！」日々、新しいやり方やモノの情報があふれるこの時代に、正直、辟易する。でも、何か役に立つことを少しは知っておく必要を思いながら、情報の多さにめまいを感じるのだ。

「でも、誰のために何の情報を？」

そんなとき、私が原点に戻られるイエス様のものの見方がこれである。

「あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」

イエス様がお用いになるのは不思議なほど、最も小さく社会的に取るに足りない(声なき)人々だった。私が周囲の人の動きやさまざまな情報に翻弄されそうになるとき、戻ってくるのはこの見方だ。すると自分の基準がはっきりし、取捨選択が可能になる。

その一つに、私が2005年暮れに遭遇したインドの大変化の情報がある。あと15年、2011年からはあと9年でインド社会は半数が中流になる、というデータだった。

「え〜っ。」半信半疑だったが、貧困国インドは90年代後半からIT産業を武器に大変容を遂げていた。が、ここで言われていないことがあった。「中流が半数」ならば、残りの5-6億人の人々は？一握りは超金持ちになるとしてもあとの人々は？これがインドの現実だ。このまま放置されれば9年後、教育を受けることもできず、今日も満足に食事を取れない最底辺の数億人は、どんな状況に陥ることだろう。

このインドで、人間以下として世界でも最も過酷な扱いを受けてきた人々が不可触民と言われた3-4億人のダリット(抑圧された者)たちである。21世紀の世界でイエス様が目を留められるであろう「最も小さい者(声なき者)たち」を思うとき、私の脳裡には、決まって彼らが思い浮かぶ。イエス様の言葉によれば、この「最も小さい者たち」が「神の国」では鍵となるのだ。だから、彼らは最終的に偉くなると言われ

るのだろう。

今年、東日本大震災の前日まで、私は3週間ほどインドで始めての地域を訪問していた。そこで「最も小さい人々」が今、手にしているトータルな成長の可能性と変わらずに直面している過酷な現状を肌で感じ



ながら、彼らが「神の国」で鍵となるように隣人として応援する私の責務を思いめぐらした。

その後、福島原発事故で苦闘する避難者の方々を訪問し、インドのダリットの人々の立場に重なるものを感じずにいられなかった。日本社会で当たり前だったすべてを失い避難民となった方々が、イエス様が言われた「最も小さい者」として「神の国」の鍵となるように導かれていることを。私たちが人として生きる意味を見失わないように、神様は日本にも世界にも「最も小さい者」を鍵として置かれるのだ。

インドのダリットの人々に戻れば、2020年までのあと9年は、インドにとって、そして、世界にとって重大なカイロスだといわざるを得ない。日本も含めて、世界各国が数億人の中流市場を求めてインドになだれ込んでいる。私たちが儲けに奔走しているとき、機会を与えられなかった人々がその町の隅で置き去りにされていくことをどう考えるべきだろう。政府だけで解決できる問題ではないことを知っているのだから。

「今」という世界のカイロスに、仕事や文化交流などでインドに関わる皆さま、関わられる地域社会で「最も小さな人々」を見究め、彼らが未来を切り開けるように小さな助け手となってください<(_)>

＜世界のカイロスをつかむ-近未来：最貧困のイスラムの人々を愛し、仕える＞

数日前、2011年の世界の10大ニュースが発表された。「東日本大震災と原発事故」は2位で、1位は「ビンラディン射殺」だった。テロ組織アルカイダを90年代世界中で生み出し、多くのイスラム若者を訓練、自爆テロも辞さない過激派武装集団に育てた指導者だ。私が暮らしていたバングラデシュでも、90年代後半、アルカイダの存在が知られるようになった。彼らは貧困に喘ぎ、機会を与えられずに不満を募らせた若者たちを探し出し、採用していた。

今、世界の最貧困地域に暮らす数億人以上は、インドを除けばイスラムを信仰している。彼らは、伝統の教えに従いながら今日を生きるのに精一杯の素朴な人たちだ。けれども、最貧困に取り残されれば、21世紀のアルカイダとして、再び、登場するかもしれない。

今年、私たち日本人は生活すべてを失うつらさと痛みを共有した。痛みを共有し手を差し延べあうことを世界にまで広げ続けることが、近未来の世界が、平和か無差別破壊の蔓延のどちらに向かうかの鍵になると思えてならない。キリストの血潮で愛された私たちが、最貧困のイスラムの人を愛して仕える。

「愛する」ことを教えられた私たちから「愛する」ことを始める21世紀に託された働きをもう一度、確認した2011年を心

に留めながら。

「お祈りください」

- **2011年、日本の一人ひとりが示されている変化の一步をさらに深め、「神の国」に近づくカイロス2012年となりますように：**多くの日本人や私たちキリスト者にとって、薄ぼんやりとしていたものが急速にはっきりと示されるときが来ていることを感じます。一人ひとりが、真実の神の声を聞き分け、歩めますように
- **2012年、私に託されている世界と日本の相互連携を見究め、関わられますように：**2011年、東日本大震災を通し、21世紀世界が相互に学ぶ機会作りの大切さを、長年の親友韓国人スファンと気づかされています。2012年は、インドや他の国でのさらに深い展開と連携があることを信じて、従って歩みたいと思います。

主にある同労者の皆さまの上に、数多くのできごとがあった2011年のクリスマスが格別の恵みで満ちますように心からお祈りいたします。2012年も共に歩めますことを心から主に感謝して。

柳沢 美登里

2011年12月21日

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈りとご支援をよろしくお願いいたします。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。

郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201

ご支援は「柳沢支援」と明記ください。領収書は振込票で代わりとさせていただきます。ご了承ください。主の働きを共にさせていただく恵みを感謝して。